

中学校社会科地理的分野における動物福祉を考える実践 ～北アメリカ州の工場式畜産に着目して～

○渡部 裕司（綾瀬市立綾北中学校）

キーワード：中学校社会科、世界地理、動物福祉、食

現代において、特に都市では自然とかかわる機会が極めて限られた中で生活を送っている。しかし一方で、人間は自然とのかかわりを一切絶つことはできず、さまざまな形で自然の恩恵を受けている。私たちが生きるうえでの根幹である食はその最たるものである。野菜、魚、肉など、あらゆる食材の原点は自然の恵みをいただくことにある。近年は、そうした食材の生産にあたって、工業式の農業によって生産されるものが増加している。

サンドラー（2019）は、「グローバル・フードシステムにおいて消費が生産から強力的に分離されることは、かくして、倫理的な怠慢に加担するよう私たちを促す」と警鐘を鳴らす。我々は、自分の口に入る食べ物がどのような過程をたどって生産されているのか、どのようにして生産された原材料からつくられているのかなどについて、きちんと把握できているだろうか。少なくとも、教育現場において、その生産過程に焦点をあてた実践は多くないであろう。渡部（2019）は、中学校社会科地理的分野の北アメリカ州の学習において、除草剤に耐える遺伝子組み換え作物の開発が大型機械の使用による大規模で効率の良い農業を支えていること、地下水をくみ上げて回転式のスプリンクラーを用いて作物を栽培する「センターピボット」が乾燥地域での農作物の生産を可能にしたこと、肉牛の生産において、本来は食べない栄養価の高い穀物肥料を食べさせる「フィードロット」での生産が、早く大きく出荷することにつながり、安い価格で肉を食べることができることにつながっていることなど、教科書に写真とともに掲載されているアメリカの工業式の生産の在り方を批判的にとらえ、持続可能性の観点からは課題が残ることを提起する授業を行った。

本報告は、渡部（2019）の実践を家畜の生産に焦点をあてて発展させたものである。近年、欧米諸国を中心に、家畜の生産過程において動物倫理（アニマルウェルフェア）の視点が重視されるようになってきており、日本でも関連する著書の翻訳等が広まりつつある。EU やアメリカのカリフォルニア州など、動物福祉に配慮した生産を義務付ける法整備が進んでいる地域もある。授業では、こうした近年の動物福祉をめぐる議論等を紹介したうえで「家畜の幸福を守る法律（動物福祉法）をつくるべきか？」をテーマとして模擬ディベートを行った。当日は、授業の様子や生徒のレポート記述の分析などについて報告を行う予定である。

【参考文献】

- ・サンドラー（2019）『食物倫理入門：食べることの倫理学』馬淵浩二訳、ナカニシヤ出版。
- ・渡部裕司（2019）「中学校社会科地理的分野におけるESDの観点を重視した実践－北アメリカ州の農業を事例として」環境教育28(3), 64-69.